

冬期における高齢者の住宅温熱環境と温熱環境調整に関する実態調査

○久保博子*、磯田憲生*、佐々尚美*

(*奈良女大)

目的：高齢者に対する安全で快適な室内温熱環境を提案することを目的とし、既報¹⁾に引き続き冬期に高齢者の居住する住まいの温熱環境の実測調査を行い、夏期や秋期の実態調査結果および実験室で得られた丁度良いと感じる気温と比較検討した。

方法：既報¹⁾の調査対象の高齢者の住まいについて、冬期および夏期において居間及び寝室について室内温熱環境の実測調査を行った。測定は温熱環境（室温0.1m、0.6m、1.1m、1.6m、相対湿度0.6m、グローブ温度0.6m）を7日間自動測定し、そのうち3日について冷暖房機器の使用状況、生活行動、着衣量、温熱環境評価等の記録を得た。冬期（1998年3/14-4/9）に7邸、夏期（1998年7/30-9/11）5邸にて測定した。

結果：住居構造により室温上昇率など気候緩和効果には違いが認められたが、夏期も冬期も冷暖房による室温の変化が大きく冷暖房機器で室温調節を行っていた。暖房時の室温の上下温度差は0.1mと1.1mで10°C程度もある場合もみられたが、ホットカーペット使用時は上下温度差は小さかった。冬期着衣量は平均で1.1cloと多く、冬期に多い者は夏期にも多いという傾向が認められた。また、寝室での暖房使用率は低い、居間での使用率は高く、居間の冷暖房の使用率に冬期と夏期で相関関係が認められた。在室時の平均室温は居間では14°C～19°C程度、寝室では10°C～17°C程度とかなり低い状況にあった。相対湿度については、50%～60%程度以上あり、低湿状況は認められなかった。室温と相対湿度より求めたSET*と実験室での選択気温と対応が認められた。

文献：1)磯田他、高齢者の住宅温熱環境について、日本家政学会第51回大会研究要旨集、1999